

**XXIIème Biennale Internationale de Vallauris  
Création contemporaine et céramique**

**Arts du feu / Transformation de l'espace : chefs-d'œuvre de la porcelaine  
japonaise contemporaine**

作家解説

ヴァロリスと日本—1951年の現代日本陶芸展  
松井裕美

東日本大震災による陶芸産業の被害とその後  
岸田陽子

## 深見陶治 FUKAMI Sueharu

深見は彼の同世代におけるもっとも卓越した日本人陶芸家のひとりとして、抽象的磁器彫刻のシャープな輪郭やしなやかな曲線の先にある、「無限の空間」という概念を表現しようと奮闘している。彼は作陶歴のほとんどを、青白磁を用いた作品の制作に費やしてきた。ミニマルなフォームから生まれる彼の作品の際立ったエッジと曲線は、あらわには見えないもの——生の循環と空間の連続性——を表現している。大英博物館や国立セーヴル陶磁器博物館のような50以上のパブリックコレクションにみられるように、深見は国際的なコレクターや美術館に対して、現代日本陶芸の意味を定義付け、その重要性と評判を高めることに貢献してきた。

深見は圧力鑄込みという技法で知られている。彼の作品はまず巨大で重量のある三層の漆喰型を作るところから始まる。磁土の泥漿（スリップ）をこの型に流し込み、コンプレッサーによって磁土を空気や不純物なく均一に固める。型から外したあと、作品を完全に乾かす。そして非常に鋭いタンガロイ合金の刃やサンドペーパーなどでヤスリをかけ、思い描いている形へと整える。電気窯での素焼きののち、青白磁釉を掛け、約30時間ガス窯で還元焼成する。その後、完成作品は作家が選んだ台座（主にクルミ材か花崗岩）に載せられる。

水平に伸びる大きな作品〈天空 〈遙>I〉は元々1993年に焼かれた作品のエディションである。現在ヴァロリス・ビエンナーレに展示されている作品は、1993年の型から作られた二つ目のエディションで、2012年に本展のために制作された。垂直の作品〈清キノ想イ〉は2010年に完成したもので、深見の垂直作品としては1998年に着想された、6つ目のバージョンである。

## 前田昭博 MAETA Akihiro

前田昭博は白磁のみを素材とした優美な彫刻的作品をつくることのできる陶芸の名手である。彼のうつわは有機的な感覚をもち、作品そのものの内側で息づいているように見える。まるで作品が内から外へと広がるようである。うつわの形は注意深く整形された口の仕上げに特徴があり、それが作品を完成へと導き、緊張感を与えている。前田の作品の多くはミニマリスティックな印象が強い。実際彼の磁器作品の特質は、白磁土の清浄さのうちに響き合う簡潔な輪郭にある。これらの一見静かな作品群が、過剰な装飾のそぎおとされた、シンプルでかつ人の目をひきつけてやまない美しさを生み出す前田の特異な才能の証左である。

これらの穏やかな、面取りされたうつわの形は、驚くべきことに轆轤挽きで作られたわけではない。前田は轆轤による彫刻的限界、形の制限から自由であることを好んでおり、轆轤を使うのはごく基本的な壺型を成形するときだけである。そのあとは手をつかって、作品の表面を押し、それぞれの面を形作るのである。うつわのふっくらとした輪郭は主に前田の手の押す力によって自由に形作られている。うつわの縁の位置を最終的に決めたのちに、前田はナイフで表面を削ることでうつわの外側から完全に自分の手の跡を消していく。面取りの仕上げにより彼の瞑想的な作業は完了する。釉掛けののち、作品は従来の磁器に比べて低温によってガス窯で焼かれる。前田の作品は機能性を超えたものである。素材そのものを称揚し、生かすことの重要性と固く結びついた彼の美学を内包している。優雅で簡潔なうつわの形を通じて磁器の内なる美を表そうとする作家の情熱が込められているのである。

## 高垣篤 TAKAGAKI Atsushi

高垣篤の作陶歴は青磁釉の実験と構成的な陶磁の形における効果に費やされてきた。彼は宋時代（960-1279）に作られた中国青磁の研究から、一つの作品においていくつかの異なるタイプの釉薬を組み合わせ、還元焼成する繊細な技術を発展させている。これにより釉薬の薄い部分では素地の鉄分が赤いハイライトとして現れる。この非常に難しい青磁釉についての見事な手腕を、高垣の作品においてははっきりと認めることができる。しかも宋時代の中国青磁の名手とは異なり、高垣は釉薬そのものの実験を重ねたのちに新たな青磁の様式を展開させた。輝かしくも薄く繊細な茜色の色調が柔らかい緑の青磁の表面の間から顔を見せている。

青磁釉の不安定さからくる問題もあり、青磁は陶磁器の中でも、最も習得に困難を伴うと考えられている。実際に室内や窯の温度、湿度のごくわずかな変化といった種々の要素によって失敗に至る可能性もあるなかで、高垣はおよそ80回あまりの青磁釉の焼成を一つの作品について行う。青磁はおびただしい回数 of 釉がけを必要とし、一層一層に細心の注意を払わなくてはならない。このため、異なる釉は異なる釉掛けの段階を必要とし、微妙な色調が失われないように各層のバランスがとれていなくてはならない。高垣は二つのタイプの釉薬が一つの作品において共存する技法を編み出した。釉薬の一つは伝統的なもので、透明で貫入が入り、もう一つの釉薬は柔らかい青磁釉の下に緋色をほのかに見せる特徴がある。この現代的なスタイルの釉掛けは、作品の飾り気のないシャープな形と相まって、高垣を青磁作家のなかから異なる地平へと連れ出すのである。

## 長江重和 NAGAE Shigekazu

長江重和は深見陶冶とならんで日本における磁器の泥漿鑄込みと焼成技術のパイオニアのひとりである。陶磁器の制作工程において鑄込みは通常実用品の大量生産と結びつけられる。長江と深見はどちらもこの既成概念を超え、むしろ積極的に転化した。長江が作品制作で経る複雑な工程は、鑄込みの技術を最先端の身体芸術作品にまで高めている。この作品はある意味で炎と作家の舞踏である。窯のなかの激しい炎は、繊細な白磁が象られ、湾曲するのを助ける。作家と炎とのこのコラボレーションの結果、これまでの陶磁器に前例のない、なめらかで予測不可能なシルエットが生み出されている。

ヴァロリスで展示される長江の直近のシリーズ〈列なりのかたち〉は、彼の鑄込みの技術の限界を試すものであり、磁土と炎の双方の性質に対する念入りな実験の頂点を極めるものである。まず液状の土をつかった鑄込みによって、二つの独立した、四角い形の部分が作られ、乾かさされ、素焼きされる。次にそれぞれの部分は窯の中の固定された金属棒に通され、中空に吊られる。釉薬がそれぞれの部分の接合部に流し込まれ、これは炎に焼かれてガラス質に変化する。これによって部分は一つのまとまりへと結合する。さらに驚くべきは、作品の魅力的な湾曲が、窯での自然な働きから偶発的に生みだされたものであることだ。窯の中で、磁器は優美なひだを帯び、薄く有機的で流動性のある形に変化する。その結果作品は、独特の、魅力的な空隙を生み出す二つの形の調和に至るのである。

## 木村芳郎 KIMURA Yoshiro

広島を拠点に活動する作家、木村芳郎は茶の湯と禅宗の根底にある哲学に深い影響を受けている。しかし彼の究極的な動機は、海と空の奥深い青を彼の半磁器、半炆器のオブジェの表面に再現することである。

木村は大学時代に47もの国を旅したおりに、古代ペルシャの陶磁器につかわれた神秘的な青の顔料を目にし、初めて土の美しさに惹かれた。エーゲ海とハワイ沖の太平洋の鮮やかな色彩を直に見たという思い出から、木村は陶磁器を通じてその自然の美を捉えようと試みている。その試みの結果、碧釉は彼の作品の特徴として広く賞賛されている。木村は伝統的なうつわの形を用いながらも、作品の表面を覆う明るい青から濃紺への釉のグラデーションによって、禅に基づく精神性を表そうとしている。彼の作品はすべて轆轤挽きで、磁器と炆器を混ぜ合わせた土に特徴がある。また木村は線的な文様を表面に刻むことで碧釉とうつわの形を強調する。トレードマークであるコバルトブルーの釉は作家が20代の頃に開発したもので、年月とともに色が成熟し現在の発色に至っている。出品作はすべて本年、ヴァロリス・ビエンナーレのために制作された。

## 中島晴美 NAKASHIMA Harumi

中島晴美は日本、海外双方において、コバルトブルーのドットのついた有機的フォルムの磁器彫刻でよく知られている。伝統や機能性といった概念を超越する土による創作に卓越した作家である。中島は作家であり陶芸教師でもあって、1976年以來名高い多治見市陶磁器意匠研究所で教鞭をとり、将来有望な若手を育ててきた。2003年からは愛知大学の美術教育講座で教授を務めている。

中島はコバルトブルーの日本の伝統的磁器に多い染付のモチーフに影響を受けた。しかし伝統的染付のデザインとは異なり、中島のコバルトブルーのドットは主な焼成が終わった後に施されるものである。釉の掛けられた生地の上からコバルトブルーを施し、もう一度それを焼く。二度目の焼成の結果、ブルーのドットは白い生地を覆う白釉の中に沈み込み、釉中彩の効果を帯びる。さらに驚くべきは、この流れ出るような有機的な土の形が手で作られているという事実である。磁土は手で扱うのが非常に難しい素材だが、中島は意図的にこの方法を選んでいる。この選択によって、作品に緊張感がもたらされるだけでなく、作家と土との格闘が最終的な形態を決めることになる。中島の作品は内から外へと激しく泡立つように見え、奥まった領域に施された小さなドットと、突出したエリアに施された大きなドットが共鳴しているようにさえ見える。こうしてドットが増殖し、自己生成しているかのごとき効果がもたらされるのである。

## 大野佳典 OHNO Yoshinori

大野佳典は、彼と同じく陶芸家である妻、大野香織と、二人の子供とともに笠間に暮らす若手の作家である。2011年3月11日の地震は大野の家とスタジオを襲い、棚にあった数多くの作品や薪窯が壊れた。東日本大震災によって被害を受けた多くの作家たちと同様、彼らの生活も大きな被害を受けたのである。この計り知れない規模の災害で、茨城県の笠間に古くからある陶芸のコミュニティには甚大な影響をもたらされた。この地域の陶芸生産の始まりは4世紀にさかのぼる。笠間は現在も陶芸作家の活発な活動を誇るが、どの作家も被災している。大野は今回のヴァロリス・ビエンナーレにおいて、笠間の窯業コミュニティを代表する作家として選ばれたのである。本展に出品する作家たちの中で、大野はかなりの若手ではあるが、彼の参加は笠間の将来への希望、ひいては日本全体の復興を象徴している。

<瞬命>と題されたうつわは、大野の短い作陶歴のうちで最も大きな作品と思われるが、有田の土を使って轆轤で作られている。この九州地方の土は白い美しい色とともに、比較的柔らかいために轆轤挽きが難しいことで知られている。轆轤のうち、大野は作品がまだ柔らかいうちに、土の表面に様々な長さの細い線を刻む。それぞれの線描モチーフは人間の生命を表している。大野の父は彼が3歳のときに他界しており、あまりに早くこの世を離れた人々の命が、まだ生きている人々の人生に影響を及ぼしていることを示すように、モチーフの短い線はより長い線を強めるように存在している。作品は素焼きののち、青白磁釉を掛け、1250度で20時間還元焼成される。

## ヴァロリスと日本—1951年の現代日本陶芸展

松井裕美

この度我々が日本の現代陶芸を展示する運びとなったヴァロリスは、フランスにおける陶磁器生産地として世界的に知られている。同市は古くから陶器制作の盛んな土地で、赤土を用いた調理器具の産地として知られていたが、20世紀半ば頃より幾人かの作家の尽力によって、民衆陶芸の枠組みを逸脱する作品が生産されるようになっていた。とりわけ同市に芸術的な飛躍をもたらしたのは、20世紀絵画の巨匠パブロ・ルイス・ピカソである。彼は第2次世界大戦の終戦間もない1947年の夏、南フランスの街ヴァロリスで、マドゥラ工房の陶芸家の手を借りながら本格的な陶器制作を開始した。これに刺激され、シャガール、コクトー、マティスといった芸術家達もまたこの街を訪れ陶磁器制作に携わっている。こうして第2次世界大戦後の南仏の街ヴァロリスには、芸術家の斬新な着想と職人が民衆陶器伝統の枠組みの中で磨き上げた技とが交差する場が形成されていった<sup>1</sup>。

ヴァロリスでの初めての現代日本陶芸展は、まさに陶器生産によって産業を新たに復興しようとする以上のような大戦後の潮流の最中、1951年に開催された。事の発端は東洋学者ルネ・グルッセの、1949年の日本訪問に遡る。当時フランス文化使節として渡日した彼は、日仏美術交流のきっかけとして陶磁器という分野に注目した。彼の着想は、やがて1950年に自身が館長を勤めるパリのチュルヌスキー美術館にて開催された現代日本陶芸展として実現される。当初同展覧会はオランダ、イギリス、アメリカなどに巡回する予定であったが、都合により取りやめになり、急遽1951年にヴァロリスへと巡回することになった<sup>2</sup>。

1950年の展覧会カタログの序文におけるグルッセによる記述によれば、日本側からの協力者のうち、展覧会の方向性に多大な影響を与えたのは、当時東京国立博物館に勤務する陶芸研究家及び陶芸家の小山富士夫であった。その趣旨は同時代人の陶器を展示するなかで、現代陶芸にも息づく日本の陶磁器の伝統への理解を促すというものであった<sup>3</sup>。このような要望を受け、チュルヌスキー美術館の学芸員であったマドレーヌ・デイヴィッドは、先史時代から20世紀までの日本陶芸の壮大な歴史を記した論文をカタログに掲載している<sup>4</sup>。とりわけマドレーヌ女史による20世紀陶芸の動向の記述には、戦後間もない日本におけるこの分野の多岐に渡る展開の息吹を読み取ることができる。彼女の記述を要約すれば、現代日本陶芸の動向は以下の5つに区分し展示されている。

1) 「公立のサロンの陶芸家達」(板谷波山、清水六和)

2) 「富本と同様の傾向の作家達」(富本のほか、1947年に発足した「新匠工芸会」の作品)

---

<sup>1</sup> Anne Lajoix, *L'Âge d'or de Vallauris*, Paris, Les Éditions de l'Amateur, 1995.

<sup>2</sup> 田口知洋「ピカソと20世紀の日本陶芸—その出会いが描いた軌跡を追う—」、『*Picasso : cerámica y tradición*』愛知県陶磁資料館、2005年、288-295頁。

<sup>3</sup> René Grousset, « Avant-propos », *Japon, Céramique contemporaine*, Paris, Ville de Paris, 1950, p. III-VII.

<sup>4</sup> Madeleine David, « Introduction », *Ibid.*, p. IX-XXI.

- 3) 「伝統主義的かつ独立した作家達」(北大路魯山人、金重陶陽、荒川豊蔵、石黒宗麻呂、加藤唐九郎)
- 4) 「民衆芸術の復興運動の陶芸家達」(河井寛次郎、濱田庄司)
- 5) 「前衛陶芸家」(宇野三吾、八木一夫、イサムノグチ)

ヴァロリスへと巡回した同展覧会は、実際にその後の日本ーヴァロリス間の交流の直接の契機となっている。田口氏の論文によれば、同展出品作のうち加藤唐九郎や中島清を初めとする 8 人の陶芸家の作品がヴァロリスの美術館に寄贈されたという<sup>5</sup>。これに対しピカソは 3 点の陶器作品を瀬戸市に寄贈した。このうち現存する一点が、瀬戸市立美術館に保存されている。これ以降ヴァロリスには、同展に出品した北大路魯山人や加藤唐九郎をはじめとして、しばしば日本人陶芸家達が足を運ぶようになる。

ヴァロリスにおける最初の陶芸を通じた日仏交流から半世紀以上経った現在も、我々の目指すところのものはまさにルネ・グルッセや小山富士夫らの理念と核を同じくしている。陶芸を通じ、日本の現代陶芸の理念と課題を示していくこと。そのことを通して日仏間文化交流に寄与すること。今日日本の置かれた困難な状況に於いてなお、現代陶芸家達の尽力は伝統と革新の結合より生まれいずる果実として日本文化を豊かに彩っている。この度の我々の試みが、技と美をめぐる現代日本陶芸家の尽力の一端を浮き彫りにし、ヴァロリスの国際ビエンナーレを訪れる人々のより深い日本文化の理解へと資することを、展覧会企画者一同切に望んでいる。

---

<sup>5</sup> 田口知洋、前掲論文、291 頁。

## 東日本大震災による陶芸産業の被害とその後

岸田陽子

2011年3月11日14時46分、東北地方を巨大な地震が襲った。マグニチュード9.0を記録した東北地方太平洋沖地震である。この地震に伴う大津波によって、三陸沿岸から関東地方沿岸では壊滅的な被害が発生した。人命が失われ町が破壊される痛ましい光景と、福島県の原子力発電所の深刻な事故は世界中で報道された。

一方で地震は東北地方のみならず、日本全国に大きな影響を及ぼした。農作物の安全性についての混乱、各種工場の活動停止や観光客の減少、それに伴う全体的な経済活動の低下などが懸念された。陶芸についても例外ではなく、地震と原発事故により避難を余儀なくされ、暮らしていた土地へ戻ることもままならない相馬焼の窯元をはじめ、東日本の多くの地域で窯や作品が壊れる被害があった。日本の民藝運動を代表する濱田庄司（1894-1978）が活動の拠点とした栃木県の益子では、益子焼展示施設「益子参考館」に残る登り窯や濱田庄司による町文化財の大皿が割れるなどしている。

しかし被害が甚大だった岩手、宮城、福島の東北三県を除くと、日本が震災から立ち直るのも早かった。震災から2ヶ月、5月の大型連休には益子で恒例の春の陶器市が開かれ、多くの観光客が訪れた。同じく陶磁器を主力産業とする茨城県の笠間でも、開催が危ぶまれた第30回陶炎祭（ひまつり）が無事に開かれた。どちらも逆境のなかで真摯に作陶を続け、被災地から復興に向けてみなぎる活力を発信するテーマを掲げた。陶炎祭の東日本支援特設ブースには辛くも壊滅を免れた相馬焼きのコーナーが設けられ、完売。悲しみや不安、困惑といったさまざまな想いを乗り越えて開催された陶炎祭には、過去最高の38万人が訪れた<sup>1</sup>。

「笠間登り窯復興プロジェクト」も立ち上がっている<sup>2</sup>。これは震災で損壊した笠間市内の登り窯をボランティアの手で蘇らせようというものである。崩れたレンガの片付けなどをボランティアが手伝い、同時に地元の作家たちによるやきものづくりのワークショップやレクチャーに参加して、笠間焼についての理解を深めていく。このプロジェクトは震災後の7月から現在まで続いており、明治時代に造営された窯の片付けも行われた。

今回の展覧会は、この30年の日本の現代陶芸をリードし新たな展開をもたらしてきた深見陶冶を初めとして、重要な現代作家たちを改めてフランスの窯業地ヴァロリスに紹介するものである。作陶の拠点は京都、神奈川、愛知、岐阜、広島、鳥取など多岐に渡る。震災当時とりわけ大きな被害を受けた茨城からは、若手作家の大野佳典が選ばれ、再生への希望を象徴している。大きな喪失感を味わった日本は、震災を節目としてまた新たな展開を迎えることになるだろう。この展覧会が過去と未来をつなぐ結節点として、また日本の陶芸表現の芯からの力強さを提示するものとして、人々の記憶に残ることを切に願う。

---

<sup>1</sup> 第31回笠間の陶炎祭（ひまつり）公式ブログ <http://himatsuri.exblog.jp/> [26/03/2012]

<sup>2</sup> 笠間登り窯復興プロジェクト <http://www.kasama-noborigama.info/index.php> [26/03/2012]